
私は死のうと思った

紗凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は死のうと思った

【Nコード】

N9349X

【作者名】

紗凧

【あらすじ】

「私は死のうと思った」と私は唐突に言う。ゆっくり、静かに、それでいて彼の耳にはつきりと届くように意識して呟いた。それはあるいは、自分への戒めとして再確認の意味を込めた言葉なのかもしれない。意志は、泉の底に沈んだ冷たい真珠のように密かにそこにあった。私は自分を殺そうと思った。そして死ぬ前に彼に会いに行こうと考えたのだ。

死ぬ前に彼に会いに行こうと思った。

地下室へ続く階段は相変わらず埃臭くて、いつも通り二十六段だった。一歩足をおろす度に忘れられたビルの六階ぐらいにある蛍光灯みたいに乾いた音がして、二メートルぐらいの高さしかない壁が脱脂綿のようにそれを丹念に吸い込んだ。明かりがないから、一歩ずつ確かめながらゆっくりと前へ進む。扉は鉄で重厚にできていて、茶色い錆が近づく人を拒むようにしつかりと張りついていて。引き戸だった。左手を掛けると、他の誰かを思わせるよそよそしい冷たさを感じられた。手首には鋭い傷跡がいくつも刻み込まれていた。

私の体力は最後にここに来たときから随分と落ちていたから、戸を開くのはなかなか難儀な作業だった。運動をしていないと、身体能力は　もちろん精神力も　気付かないうちにすくと落ちてしまう。そうなると思はれていた簡単な動作にもすぐく骨を折る羽目になるのだ。でも幸いなことに、体力を必要とする自殺の方法を私は知らなかった。

部屋の中は青かった。黒ではなくて、広い一室の奥にある作業用のデスクのライトだけは点灯していたから、そのせいで洩れそうなくらい僅かな量の光が淡く広げられていた。その白い光は彼の背中の逆光線となっていた。前よりも成長した小さな背中だった。三秒くらい経って彼は振り向き、部屋の明かりをリモコンを使って点灯させる。一瞬見せた警戒の目は、彼はすぐに解いた。

「ミナ？」と少年は言う。明かりはどちらが明るくてどちらが暗いのか思い出しているみたいに点滅を繰り返している。「やア、ミナか！　久々だねエ、元気にしてた？」

「あなたこそ」と私は言う。

青いな、と言って、彼はにやりとした。「重たいブルーだ。フウン、大分痩せちゃったらしい。顔もやつれているねエ、ミナ」

「余計なお世話」

「今日はまた何しに来たの、君？ ドラッグ売ってくれって言ったってここにはないぜ？」

「うるさい。あなたも相変わらず何してるのよ」

「人ン家勝手に上がり込んだクセにいきなり質問に無視するとは態度がでかいなあー、君。まあいいさ。というか、ウン。見ての通りだよ」

昔から変わらないその声は必要以上に軽快だった。何もかもが重苦しい地下のものと相まって丁度良い質感を生み出すくらいに軽い。むしろ不気味に感じるほどの軽快さだった。じめじめした空気は細かく振動し、部屋にある物体が拒絶し反響してしまうような声を彼は有していた。

回転イスから立ち上がって彼は両腕を広げる。右手にははんだごて、左手には毛糸で作られたキャラクターの首（のみだ）を掴んでいる彼がしていたことなんて相変わらず見ての通り分らない。「創作だ」と少年は言う。何が創作だと私はいつも思う。「あなた、いろいろと陰口言われてるわよ。だいたいが『地下室にひとりこもって目的もなく意味のないものを淡々と作ってるキチガイダメニート』とかそんな類だけど。いい加減」

「へー、と彼は口を歪ませ、からかう。「ミナに陰口を言ってくれるような知り合いなんていたっけ？ 僕はてつきり、君があれば私も」と孤立しているモンだとばかり思っていたよ」

少年はくすくすと笑う。

「うるさい！ ……だから、なんでこんなものばかり作ってるのよ」「君は僕を社会に出すための説教をしに来たのかい？」と彼はいつもの楽しそうな口ぶりで言う。「くく、それに、なんで僕が意味のないものを創ってるかって？ 笑わせるねエ、僕は、意味がないからこそ創ってるんだぜ。ミナは知らないだろうけど、そういうものは僕ら人間にしか創れないんだ」それに、と彼は付け足す。「まったくの無意味ってわけでもないよ。例えばこんなものに惹かれた君

がこうしてそこにいるだろう？」

床にはいろいろな「創作物」が散乱している。手の平サイズから両腕でも抱え切れないくらいのおっきなもの。子供の工作のようなものもあれば、比較的巧緻な出来のものもある。重量感を感じさせるものや、すぐに壊れてしまいそうなたくりのものまで、それらは本当にバラエティに富んでいた。十五メートル四方もある床を埋め尽くし、歩くスペースもほとんど見つけれない量だというのに同じものは何ひとつとして存在しなかった。ただすべての「創作物」に共通する点としては、意味が欠落しているということが挙げられる。ここに転がっているものはことごとく目的もないまま作られ、意味をどこかに置き忘れた状態で凍り付いたように地面に横たわっていた。まるでこの世界みたいに意味がなかった。

「世の中ってというのは」と彼は続ける。「目的を持って生まれてきたもので繁雑してる。この世界の大半のものごとには、意味がある。だがそんなもの、別に人じゃなくなつて、動物とか、機械にだって作れるぜ。でも意味のないものごとは人間にしか創れない。まして、そこに意味を見出すことなんて他の何ものにもできないのさ」

私は死のうと思った。

「私は死のうと思った」と私は唐突に言う。ゆっくり、静かに、それでいて彼の耳にはつきりと届くように意識して呟いた。それはあるいは、自分への戒めとして再確認の意味を込めた言葉なのかもしれない。意志は、泉の底に沈んだ冷たい真珠のように密かにそこにあった。私は自分を殺そうと思った。そして死ぬ前に彼に会いに行こうと考えたのだ。

「あなたなら、良く死ぬる方法を知ってるんじゃないかって思った。あなたはこんな狭い一室で人生のほとんどを過ごしているというのに、私よりずっと多くのものごとを知っているみたいだったから」と私は言う。「もし良かったら、だけど」

饒舌だった彼は言葉を森に落としてしまったみたいにぴたりとしゃべらなくなつた。それから私の顔をただ物珍しそうに眺めるので、

私自身も石をくわえたように口を動かすことを忘れてしまっていた。ねばねばした沈黙が部屋に点在するものごとにしつかりとこびりつく。冷たい川底でふたり息をひそめ合っているみたいになる。暗い人工灯の光が影のように射す地下室の外では、ごうんごうんという工事の音がただ無機的に飛び交っていた。

真顔だった彼の表情は気付けば何かに酔いしれた笑みに変わっている。

「もし良かったらだけど」と私は砂時計をひっくり返したみたいに再びしゃべり始める。「私が死ぬための――」

私が死ぬための道具を作って欲しい、と私はきっぱり言う。

冷たい沈黙の沼が性懲りもなく部屋に流れ込む。ホルマリン漬けにされた生物の死骸の気分というのはこんな感じなのだろうな、と私は脳の三パーセントくらいを使って思っていた。それはあまりに孤独で、どこまでも不適切な形の静けさだった。地上で鳴り響いている質感のない機械音がそれを助長しているようで、私は少しずつ腹を立てさえる。彼は顔に変わらぬ笑みを張り付けたまま動かない。今にも身体を仰け反らせ、歪んだ表情と共に暴力的なまでの笑い声を地下室に響かせようとしている風に見えた。でもそれが訪れたのはもう少し時間が経ってからだった。

少年は笑い出した。それも、非現実に見えるくらい爆発的に笑い始めた。予兆が静かすぎた嵐を想起させるくらい、彼は腹をよじり、床に倒れ込み、「創作物」の海に溺れるように圧倒的に笑い転げている。彼の姿を見ていると、私と少年がひとつの部屋で違う世界にいるみたいに思えてくる。私がこちらの世界からあちらの世界を傍観しているのだ。ははははは！ とひとりの少年が病的に叫んでいる。こちら側はひどく寒い。

「いいねエ」とやがて彼は目に浮かんだ涙を拭いながら言う。「最高だよ、ミナ！ 自殺なんて、この世界じゃもつともと言っていいくらい意味のないものごとのひとつだ。サイコ・だ！ 腕をふるって、君のために死ぬための最高の道具を作ってあげるよ！」

待つてて、と言つて、彼は立ち上がる。よろよると入り口　出口でもある　へと向かつて歩き始めた。電柱のように呆然と立ちすくむ私の左隣を、青白い顔を歪ませた彼が通行人のように通りすぎる。引き戸を開けたと思われる鈍い鉄の鳥の啼いたような音がして、それきり地下室は乾いた静寂を広げこわばっていた。寒いな、と私はひとり思っている。

彼は数分で戻ってきた。時計がないから正確な時間は分からないけれど、たぶん五分くらい時間がすぎた。低圧のために膨張してしまつた風船みたいな五分間で、私には実際以上に長い時の流れに思えた。でもいつも彼は五分くらいで戻ってくるから、今度もまた五分なのだろうと私はぼんやり思案した。もちろん時間も思案も私をどこかへ運ぶことはしなかつた。

少年は右手に持つていた紙袋を乱暴に作業用のデスクに置くと、何も言わずにイスに座り、中から短い鉄パイプやらナイフやら針金やら、綿とか鉛筆とかにかくいろいろなものを取り出した。机の傍に転がっている「創作物」をふたつみつ拾つて、それも机の上に置いた。これから何が作られるのだろう、と私は傍らで無言のまま少年を見ている。デッサンをする時のようにじつと、客観的に対象物を観察していた。彼の小さな背中からは何だか嫌な感じがした。少年はこれから私が死ぬための道具を作るのだ。

嫌だと思つた。

彼は何かに取り付かれてしまつたみたいに　もしかすると実際に何かに取り付かれたのかもしれない　作業に取り掛かつた。何をしているのかまでは彼の背中に隠れて分からないけれど、少年の狂氣的に湾曲した表情ばかりはこの場所からでもありありと感じることができた。充血した目は眼窩に収まるのをやめ、鼻孔は膨れ上がり、三日月の形に吊上がった口元からは涎が垂れ滴つていた。少年の身体からは煙とも煤とも^{すす}取れない暗褐色の影みたいなものが発生しているように見えた。もちろんそれは私の錯覚なのだろうけ

れど、八回くらい目をこすったところで消えるような幻でもなかった。それは彼の心情を端的に表しているらしかった。

私は廃屋みたいにひたむきに、その場で彼を淡然と見つめることしかできなかった。当然、私は待っている。彼なら私が良く死ぬための最高の玩具を作ってくれるだろうと信じていて、どんなに素晴らしい死ぬだろうと心から完成を待ち望んでいた。死ぬことに対しての抵抗はまったくなかった。むしろひどく死にたいとさえ思っていた。それでも私は嫌だと思った。いやだ、と私は小さく声をこぼした。

「いやだ」

少年の手は止まらなかった。声にならない声を、唸るような言葉を排気ガスみたいに後に残してひたすら作業に没頭し続けていた。意志を持った機械は、あるひとつの目的に沿ってものごとを成し遂げようとしていた。結局のところ、それが私の感じている違和感、嫌悪感の正体なのだろうと私は漠然と思っていた。

嫌だと思った。彼が何か意味のあるものを作るということがたまたなく不適當な経過のように感じて、怖かった。そして私はその帰結によって自分を殺すのだと考え、教室の一隅でくすくすという嘲笑いの声の網にすっぽりと包まれてしまった時のような、理不尽さ、卑怯さに対する怒りに近いあの感情を抱かずにはいられなかった。私は咽ぶような叫び声を漏らした。泥のような涙を流していた。

「いやだ」と私は叫んだ。

気が付くと、彼の背中に抱き着いていた。少年の白いうなじに顔をうずめ、声を上げて泣いていた。左手首に刻み込まれたいくつもの切り傷がきりきりと痛んだ。もう工事の機械音も聞こえなかった。彼の身体にこもった確かな温もりを全身で受け止めながら、同時に身体の内から湧き上がる日の光のような熱にどうしようもない意識をめぐらせていた。やめて、と私は囁いた。

「はなせよ」と彼はぶっきらぼうに言った。いつの間にかその手は

作業をするのをやめていた。「僕は恋なんて意味のカタマリみたいなモンを作りたくはないんだ」

やめるよ、と彼は溜息交じりに言う。

私は彼の背中に長い間身をもたれ掛けさせていた。まだ彼の体温に肌を馴染ませたかつたし、鼓膜を打つ弱い心臓の音を聞いていたかつた。私の身体はすぐ冷えていた。闇の中、太陽を求めて地球の周りをぐるぐるとさ迷う孤独な月のように、恒久的に失われた温もりを内側から欲していた。静かな光を、眠りのように自分の外側に求めていた。私の目からは涙がとめどもなく溢れていた。

形を失った時間が意味も目的もなく流れた。でもそれはやがて私の涙の源泉をさらうように涸らす。際限もないものごとに始まりを与え、終わりを予感させるのだ。そうやって私は、時間に付属した意味を井戸から水を汲み上げるみたいに見出すことができる。そして私が見つけた意味は、私にしか見つけることができなかつた。それは見つめる場所や時間によって形を変えたとらえどころのない雲のようなものだった。私は彼から一歩はなれて涙を左手で拭った。「ごめんなさい」と私は言った。ありがとう、と私は思った。

少年は私に背中だけを見せながら、「ふん」と愛想のない鼻声を漏らした。「死ぬのは保留にするのかい？　それとももう、諦めちまつたのかい？」

私は首を横に振った。「やっぱり私は死のうと思う」

ならどうする、と彼が振り向いた頃にはもう私は鉄の戸に右手を掛けている。傷もなく、おまけに瞳を覆った涙の薄い膜によって視界がにじんでいたために右手首は穢れのない乳白色をしていて、

自分で言うのも何だけれど　綺麗だった。思い切って扉を開き、上のほうを見上げると地上の光が導くように階段を照らしていた。眩しさのあまり私は目を細めずにはいられない。とても長い間地上の光というものを忘れていた気がする。私はひとつの国境を越えるように、決意の朝を迎えるように、足跡を刻み込むつもりで、その一段目をゆっくりと踏みしめた。

死ぬ前に何かを創ろうと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9349x/>

私は死のうと思った

2011年11月3日03時14分発行